

明治十三年八月廿一日出発

萬 邑 紀 行

秋田県南秋田郡山田村十二番地

石川理紀之助

萬邑紀行解説

明治十年の「初めぐり」に次ぐ紀行文である。
 明治十三年八月廿一日に出発し、九月八日に帰つてきている。秋田く山形く宮城く岩手く秋田と、四県一回りの、往復百五十里、十九日間の旅行であつた。

仙台で開催された博覧会の巡覧がこの旅の目的であり、この紀行の内容を「農況親報」として報告書にまとめている。

この紀行は行く先々の村々の田畑の作物の種類及び成育状況等を詳細に記している。歩く、見る、確かめる、書くという日々があるが、その精励ぶりはまさに超人的で、その観察は実に鋭い。

博覧会での慨憤をみると、当時の石川翁の求めていたものがよくわかる。農機具の性能向上による農家の生産性向上、ひいては国力の向上を願っていたのである。

旅程

八月廿一日	豊川山田	く	秋田馬喰町
八月廿二日	馬喰町	く	川辺郡平尾鳥村
八月廿三日	平尾鳥村	く	仙北郡神宮寺村
八月廿四日	神宮寺村	く	平鹿郡横手町
八月廿五日	横手町滞在		
八月廿六日	横手町	く	雄勝郡松沢村
八月廿七日	松沢村	く	山形県最上郡乃位村
八月廿八日	乃位村	く	北村山郡花沢村
八月廿九日	花沢村	く	南村山郡山寺村
八月三十日	山寺村	く	宮城県名取郡愛子村
八月三十一日	愛子村	く	宮城郡仙台国分町
九月一日	国分町	く	宮城郡松島村
九月二日	松島村	く	遠田郡小牛田村
九月三日	小牛田村	く	栗原郡有壁村
九月四日	有壁村	く	岩手県胆沢郡金ヶ崎村
九月五日	金ヶ崎村	く	岩手郡岩手呉服町
九月六日	岩手町	く	秋田県仙北郡生保内村
九月七日	生保内村	く	仙北郡境村
九月八日	境村	く	豊川山田

明治十三年八月廿一日 門出す。持三十一円五十銭
斗り。

天気よし。正午に小泉に至り兄恒助とともに出立。鴉崎に立より追分なる西岡重蔵に暇乞して八橋植物園に至るころ午後の四時ころなり。石川氏に逢たり。同氏近頃鉄砲町に宿かへんといそぎの所なり。兄西岡よりのことづてを石川氏に依頼せり。こは小滝氏けふ帰郷せしよしにて不在なればなり。石川氏に離別せり、五円余金入る。

それより通町の橋本に立より川口屋より日外送られたる金三百文何の価なるや知られざれば返しぬ。又机の箱代四百文ともに常女に渡す。兄は直に馬喰町に行おのれ壺丁めより別れ、杉原氏に立より百姓伝一二合本を杉原弟なる人に渡しぬ。こは写本の為牛丸君へとどくるのたのみなり。それより馬喰町に至れば日くれぬ。ここにやどりぬ。

廿二日 晴天 自 馬喰町橋本慶助

至 平尾鳥村角田莊左エ門

朝とく牛島より仁井田に至り、これより川辺郡
巡覧の為め枝道に入る。

仁井田村

過半矢嶋文吾を植、本年殊に宜し。

本年旱天の為め岩見川水上は上作なり。芝野、

四ツ小屋猶同じ。

矢島文吾は無毛にして谷地本田に植ては白穂
出る也。堅田によしとす。

県下に四ツ小屋など同じく蔬菜を出し処なり。
露の刈あとに踏糞肥を散布して見ゆ。

会津といふ稲少し見ゆ、白毛也。米取少しとい
ふ。

五升成も米取せし少しあり、たんほともいふよ
し。

四ツ小屋村

平坦の地なり。御物川を西にして川向に新屋、
石名坂等見ゆ。東の山間に末戸、松本、畑屋より
岩見山内につづく。此岩見沢は横山と川島辺御物
川筋との間の一小沢なり。本年旱天の為川水を以
て耕し田は用水充分にして甚宜し。雨つづく年は
不宜地なるよし。仁井田に猶同じ。

柴野村 通路川挨

四小屋の末より岩見川を渡りて柴野村に至る。
此川末儼にして御物川に合流す。

喜三郎稲、此稲を多く作り本年よろしきよし。

矢嶋文吾より稲穂しだる稲なるよしにて、其景状異なる事なしといへども少し早稲なるのみ。

白川も処々に植。

此辺まで平坦なり。

椿川村 通路川挨又は山のあま岩交りさい土等也。

枝郷かのと村に至る。此辺より稲架木の囲あり。いか様仁井田、四ツ小屋辺よりは風疎からんと覺ゆ。かのとより小山の末を過て椿川に至り、東の山添の近き村居なり。

平沢村 本村、枝郷三ツ沢村

平沢本村は御物川より東川添にあり。それより川を渡り枝郷三ツ沢村に至る。これより由利郡に越る道あり。此村皆家並よく同村に自由試験処伊藤半治を尋て昼食す。此人父母によく仕ひ正直にして人望あり、年四十ばかり。

豆蒨車一ツ石井忠篤君までとゞくる約をなせり。

自由試験処に五六種細葉庄内早せ、朴き早稲等を植たり。

相川村

水沢より川西の山根を伝へて相川に至る。これより川を渡り妙法に至る。川水平年、極旱なれば歩の瀕踏する事もあれども、本年荷付人の自由に

往来する。古老も未だ知らずといふよし。

妙法村

川東山根につゞく村なり。この村末より山根を伝ひ野山なり。向川西をみれば相川より戸賀沢につゞき、それより田地あり女米木村見ゆ。これ間に砂の芝地あり桑など植たれば、川辺より埃土を運び培養手入するにかなりならん。芝地は川埃なきよし。此西に対して女米木山あり、この山より県下よりも見ゆる山なり。それより川南に土手子其他の村々あるよし、地も少し広し。妙法、相川のあたりは極狭し。

川西の山根を伝ひ御物川の土手子、小種の方より流れきたりて妙法の方に川曲れり。此曲り口より東にさしたる沢あり、これ平尾鳥村なり。

平尾鳥村

此川口より村家百方に散在して村中壺里三十丁、至る処一二軒宛村家あり。土味も宜しく稲の出来もよろし。されど三十丁ばかりの奥は砂地にしてよろしからずといふ。此村の戸長角田総左エ門の処に宿りぬ。おもしろき弁なる男にいろいろの咄して更夜ぬ。

佐手子村佐々木善助など人農事にも篤志にて、

強きに強く弱きを救ひ、年五十斗にして人の国なる事をせんとして沙汰よし。

此角田氏も杉林のあとに桐を造りて窮民を救はんとて着手中なるよし。此佐手子村は山に富めり。古来農具製作して売出する事府内秀一の村也。第一土臼、村中より年々秋巡村するもの三十人名余。

とみ万石、二三名あり。これは木材をからすして作らざれば損易き。薄め曾て用意して注文に任せ作る也。第一ろくろの櫓は五六年も火の上にあげてからすといふ。

此とうみは此角田総左エ門氏の四代祖総左エ門なる人農具製作の為諸方を回り土臼を造るに、小泉村奈良氏に在りて大坂伝のとうみ下りたるをみてこれより製造初めたり。此とうみはのみ口の下に箱あり今も諸方に残れり。これをみて酒井武助なる人と合力して今のとうみに工夫し直たるよし。

其他鋏台をはじめいろいろ作る也。これを出に南秋田一円、由利一円、仙北は大曲辺より角館辺に皆用ゆ。とうみの産いと広きもの也。酒井武助のひ孫兵治なる者本年十三才にてよく万石を

つくるよし。今齊藤喜太郎を上手とす。

炭焼業三十人

蕨根堀、蕨の根堀は舟沢に出る。大方此平尾鳥の山より出ると也。砂地のさくさくしたる俗に山砂といふもの也。蕨よくかつ堀易く、蕨はいさゝか十日ばかりの間のみ隙ありて、其他平日夥あるもの也。

此郡仁井田に至れば由利の細にほを作る。回り細く中に柱を立、やねは大方藁の茎三抱かうはい也。平尾鳥は戸数百二戸、耕地百四十丁余。

奈良氏の道すがら咄に西岡云、つきは水気を好む故に根回りに雑草を纏おくに、水気滞りて旱年によしといふ。私云、これらの理は干葉を培養するも。

里程、秋田より平沢まで三里半、平沢より平尾鳥角田氏まで二里余、合六里位。角田より佐手子まで二里余、峰吉川まで二里余、舟沢まで壱里、戸島まで壱里半余。

六七日以前より仙北郡荒川、川辺郡舟岡其他村々連続の官山に火事あり、日々霞の如く空に聳え拾余里の遠く見ゆ。四里四方位延焼せり。

夕暮後雨あれどもぬるほどに非ず。此山里は朝

霞て深山の景況なり。

兄曰、小豆、てんこの類は湿気に植ればあけ付ずといふ。

平尾鳥にて、土臼の上手鈴木藤助、万石簾の上手酒井又右エ門。

同村の出口通の土よろしき処は亀田早稲、矢嶋文吾を植る。此兩種大方景状得失とも異なるなし。奥の冷水かゝり等の地にはすなら早稲、大黒などを植、すなはは既にこごみたり、白毛なり。

由利元亀田領は農事に尽力する事秋田農夫の一人半余に当るといふ。山を開墾等する最も出精なり。

蕨粉は入梅中は粉至て少し。彼岸より粉最多しといふ。早につく者なる故に本年の如く早く老て粉多分ならんと。野山よりは林立の葉茎の大なるに粉多し。

平尾鳥は石なくして馬足あし。淀川は石ありてよろしき由。

八月廿三日 晴天 自 川辺郡平尾鳥村角田莊左エ門

至 仙北郡神宮寺村細谷政之助

里程 六里

朝とく平尾鳥を出て山を越え中淀川に至る。

中淀川

平尾鳥より野山を越中淀川に至る。此村は上淀川の末にて又此下に下淀川あり。種沢に川水出るといふ。此村を横通り又山に登る。平尾鳥は川挨山に登れば山砂なり。中淀川に至り少し砂利交れり。山に登にいとけはし。東に峰の山を対しつゝ通る。やゝ過て嶺に至りて南を望めば大沢郷宿村あり。この東に当りて野あり、これを上子坂野あり。

上子坂野

今野庄エ門咄

南北一里余、東西半里位のよし。土は上は一尺位黒ぼく土にして、下は赤く山鳥土といふ土質なり。大根など可也出来る也。上地に非らざれども大張野の如き悪地にあらずといふ。五ヶ村入会の草飼地なり。其内檜台などいふ地は砂地にして甚よろしからず。これより下りて峰吉川の村郷に至る。山口にて西に望めば小阿久比村見ゆ。

峰吉川村

村郷湯の沢村に至る。御物川添の村也。耕地真土にして稲の出来立殊によろし。されど秋田に比すれば生長劣る、されども植莖少し。それより山

と川との合の畑を通りて峰吉川の本道に出。

刈和野村

今野庄左エ門を訪ふ。同氏の自由試験所を一見せし。いとよく培養せり。

ほらさへ大豆、江戸種。花は藤に似たり、葉は菊に似たり。さへは太く短かく大方三粒位、実はけんとくの如くにて丸く中凹み、薄毛の生たる薄赤色なり。八月初に収穫す。珍敷種子なりとて珍重せり。

かきつさ、同断。つさにして一本立に垣ねなどに植てよろしかるべきけしき也。此節花を開かんす。丈け三尺五六寸にして若き時葉を掻食ふ。老て花を見且つ籬などに植て美ならんとす。

本年菜種は平作なり。昨年の上作に比すればおくれり。

麦は上々作なり。三斗入にて十五貫目の量あり。平年十二三貫目を常とす。随て粒にこうあり、二十年以来の作なりといふ。

由利郡亀田領中田代には鋤台の産なり。製作は最も上手なり。上三郡大くこれを用ゆ。

亜麻仁は馬のないらに煮して用すれば即功あり。常に腹さするも又功著し。

玉蜀黍多く殖実したり。本年は湿気の地は平年の二三年の収穫一時に得たるにあたる。

綿引うりの産地なり。畑二人一人なるよし。通町橋本とどけにて代八十錢今野に渡しぬ。

北檜岡村 ことなる事なし。

神宮寺村 猶同じ。

八月廿四日 小雨 自 神宮寺村細谷政之助

至 平鹿郡横手大町小川惣吉
朝とく神宮寺を立、川を渡る。旱天の為瀬踏する斗りより水なし。

花立村

大曲村

飯田村 これより枝道に入る。

大保村

角間川村

北島易之助君に立寄る。荒川兵助来る。北島氏より兼て依頼になりたる敬の一字と拍氏の校書を渡しぬ。彫刻は在京狩野氏を依頼するよし。

金沢西根村

池田松五郎を訪ふ。同氏本年植たる多分の稲は赤牛、わら細く長く使ひ、藁にしてよろし。米

質味ともよし。粃薄赤し、坊主稲也。もちの質に近し。虫害あり、すい虫、土地真土のよし。

大黒、文六より抜穂したる稲なるよし、土地を嫌はず。少し赤き毛あり、文六の本稲には毛なし。

或人曰く上黒、赤牛は甘し。小阿久比はもそつき（古米の如く油気なき方にて）御夢想は耳なし。

近世上黒、清水上黒ともいふ。澁水の地に適す、米質悪し。近成なり、常の上黒とは異なり。

常の上黒の種所望改仕送る。横手同人曰く、豆腐豆は川俵又は砂地の豆はごうなし真土にかざるべし、実験したりと。

此村は村中既に二里あり、東西に長し。畑作は上作なるよし。総て仙北辺諸作よろしといふ。

安本村

平鹿郡横手町

平鹿郡役所あり、こゝにて池田吉兵ヱに逢ふ。

同人も玉蜀黍を解器械を工夫して遣すの約をしたり。三四日以前に大森二百余戸焼亡す。

八月廿五日

自 横手町小川惣吉
至 滞在

廿四日夜半より雨強し。朝晴れたり。

朝高垣慎吉を訪ふ。不在にて土産を残して帰る。

金沢西根にて木陰に丈け五尺に近く黒髪の蕊強き稲あり。一本抜穂したり、まだ若し。

金沢西根の池田氏干瓢の器械を乞ふ。

今朝出立せんとせしを池田氏進めにより横手町根岸なる尚友庵にて歌会を催したり。大宮源吾其他十六七名打集たり。和知源左ヱ門に立寄、同人も同行せり。日中残暑なれど薄暮より雨となり、夜半より風雨となれり。

八月廿六日

自 小川惣吉

至 雄勝郡松沢村糸井茂助
午前西風強し。午后より小雨ふる。

午前出立、横手郡役所、植物試験所、かなりの出来立なり、記すべき件なし。

安田村

大屋村

新藤柳田村

石成村

醍醐村

伊藤謙吉を訪ふ。同氏にて昼食す。小川松右衛門まで同行、同処にて休足して別れたり。同人試

験処いとよし。且つ葡萄結果殊の外多く、畑作よろしきよし。

梨木羽場村

十文字村

佐加会村

小川松右エ門へ立寄、昨夜の雨にて岩崎川増水にて川留相對にて舟にて渡る。

岩崎町

成沢村

杉沢村

糸井茂助氏に止宿。同氏の囲内を巡視するにいつもの如く成育宜し。同氏の咄に

桃は老木を切り幾度も若しはへを育て、取立に利あり。如此すべし、結果よろしと云ふ。

姫胡桃は脇を打ば口を開き、実は足駄になりて落る。

春土用前なれば諸木とも大方指木になると云ふ。楮春出芽の際と秋収の後にすべし。総て木は如此に利あり。

芋は古根替て新芋の生育する際肥用すべし。

根なし蔓の種注文せり。

同氏の試験地二丁余、年中人足六百人、代百二

十円。

一畝歩より大豆斗り植たるは三斗の見込。

白葡萄には白水を蓄へ上水を流す、をりを取て肥料とするに最上なり。

木の末の冬枯するは木の若き処冬寒に傷むなり。故に夏土用に至り木の末を摘つて秋中に不残木にするなり。さすれば冬枯することなく、更に脇芽よりよく翌春發生するなり。

根に肥するは冬中木の寒に負け苦しむを、湿氣を与へて助くる為なり。

釣瓶壺つ糸井へ遣すこと約す。

芋は秋彼岸頃施糞するも甚だ利あり。但芋の横なるひげ根に肥料届けば自然に生育す。

百合は新八月に至れば肥料して益なし。

八月廿七日 自 糸井氏

至 山形県最上郡及位村高橋雄作

終日雨ふる、雷鳴す。

雄勝郡作合田畑ともよろし。

杉沢村

湯沢町

郡役所、試験所に立寄。中の出来記する件なし。

関口村

上関村

相川村 昼食

桑崎村

高橋正作を訪ふ。不在、孫理造に逢ふ。自由試験地見物、最上の出来なり。あは、苺、そば、大豆、栗。

小野の大栗五升注文、代に向七十錢渡す。通町橋本屈を乞ふ。

小野村 小町の芍薬見物。

横堀村

下院内村

上院内村

持が沢はし、下三曲はし、上三曲はし、下岩萩はし、上岩はぎはし。

過日より発破の為め往来留なれども、雨天の為め土方休日にて通る。

是より山形県最上郡朴沢に至る。

朴沢村

秋田杉峠を越、則麓まで深山也。田畑とも宜からず、栗の長き穂あり。

及位村

此村本年五月焼亡なるよしにて過半焼、小屋住居。且新道は川向を通す為め、便宜の地に移住するよし。蚊なし。

鮭川

是は及位より流るゝ川也。未だ最上川に入るよし。

産物 紫蕨、凡村中千貫目位。

これを製造するに湯でたる上に藁あくにまぶし干上ると也。さすれば色よく美且締り上品となり、又雨湿の候にも傷み少しと云ふ。大坂に登せるよし、商人は秋田の横手、湯沢辺の人多し。

此村は一の山中にて田畑とも深山の出来宜しからざる也。

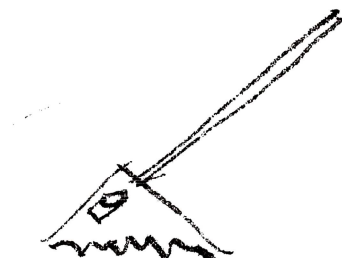
八月廿八日 晴天 及位村より

井田

北村山郡尾花沢村鈴木八右エ門

及位より東の山を越此村に出る、南北に長き沢也。田は五六寸を放植、水は掛流、大豆は蒔也。苗代は生草又は柴に入る、畔に大豆を植る。稲一株の穂五六本より八九本に過ず、苗代は此頃まで鋤にて搔耕す。

谷地こすりあり。



鍬は雄勝鍬の形也。

飛森 山中に二軒斗りあり。

金山町村

飛森を過ぎ金山町村に下山す。これより稍沢合
広し。及位より三里余。

山崎 十七丁

此処にてはく爪を買ふ。金色にて丸く短し。

上台 十八丁

金山より北より南に渡り東西に長き沢也。金山
より此処まで一の沢間也。

萩野

此間にあかはげ野と云ふ広野あり、悪土也。

泉田村

十日町村

此処に高檀と云ふ野あり、野中に天野昭太郎と
云ふ帰農の士ありて訪ふ。大豆と栗を追て送らんとす。

新庄町 昼食

此辺田地可なり也。野中を過ぎ大橋あり。

船形村

此処より仙台へ通る道あり。さはね峠を過ぐ。
此処にて北村山郡と界す。南に見下す処々に広野あり。

名木沢

黒沢

萊の産処なり。今一番取り、丈け八九尺。肥は
干草を焼となり、又柴をかけ焼く処もあるよし。
一度より不取と云ふ。なで板た台は一分板のなで
るにたをたをするを用ゆ。

広野あり。

北村山郡役所、苗木試験所あり、いと宜く取立
見ゆ。黒ぼく土也。大橋あり、丹生川はし。

萩袋

尾花沢

早稲の稲穂取たり。

蚊屋を張たり。

此辺田畑農具共最上郡に異ならず。
尾花沢より仙台的奥へ通る道あり。

八月廿九日

自 尾花沢

至 山形県南村山郡山寺村

晴天。午后少々夕立雷鳴。

朧気村 おぼろげはし

五十沢村 萊猶あり。

土生田

総て此郡屋根葺薄し、けれどもきれいななり。

土白は布べりの小白也、木白も見ゆ。

藁は百五に至て草を掛焼、即今取たる跡へ馬肥
を掛其俣致置く。

本飯田

此辺よりよき紙巻のわらんじあり、代十六銭。

林崎

此辺まで処々山也。総て漆木多し、田地も中等
以下なり。萊あり、箕は皮箕を用ゆ。楯岡より組
箕あり。

楯岡

東に古館あり、山根につゞきたり。能き町居な

り。南下りの田地にして田面広く稲の出来もよし、
上等の田地也。苗代はまだ搔耕す。

畑垣に麦又は柴にさゝげを植たるあり。

宮崎 白水橋を界にして村落続く。

六田村

これより宮城関山越の脇往返あり、仙台まで十
八里の由。

葦の産処。田の土を干籠して糠を入腐熟したる
を下肥とす。包丁搔也。十枚位掛真を留め脇芽を
搔く、下葉を早く取也。手肥は油粕を用ゆ、粉糠
は星生じてあし。間だ一尺五寸、土は黒ぼくの赤
づけたる小石交りの土也。葉は盒さず、此頃搔た
る者粗見ゆ。

畑作大旱損、たばこ真出ず。

神町村 よろづよはし二ヶ処

乱川村

孝野森村 川堺町の中央也。

東村山郡天童

芦粟試験したるは近村今木村某なるもの、結晶
せず。

芳賀村

北目村 清池はし

七浦 みどりはし
長町 千とせはし

南村山郡山形

県庁、師範学校、警察、製糸。此近辺は上は上作也。総て土地稲よし。殖茎多し。

千歳園、公園地、県庁より東に上り園内の植物最もよろし。三四町の地と見ゆ。芦粟よく出来たり。成実黄茎甘け充分也。

風間村

山形より山根を通り此村に出る。

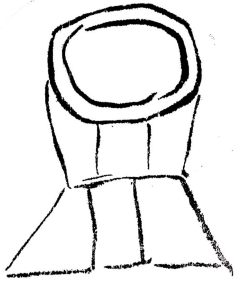
村中に桶大小六つたる水車あり、手帳に図を譲る。原野を経て山寺村に至る、山形より三里半。

八月三十日 自 山寺高砂や

至 宮城県名取郡愛子村佐山今朝吉

山寺朝見物、是は図に譲る。

山寺辺に用ゆる腰切臼



山寺より二三丁にして村につゞきたり、山根の村也。水車は手帖にゆづる。

雲かゝる梢のおくにきこゆ也岩根にひゞく山寺の鐘

馬形駅

これより山間に入り山の流を左にし右になして二口峠にのぼる。

山寺を曉立て二口の峰より秋のよは明にけり

峰にのぼらぬ内に陸前国名取郡との堺あり。登

り凡そ一里半位峰にのぼれば村山郡見ゆ。是より

宮城県に下ることわづかにして、

二口の茶屋 二軒

やゝ下り左に数十丈の高き岩山あり。一山みな

大岩にして松生ず、水なき滝のごとし。

さと人はけわしき道もふみなれてやすく越行峰

の岩かど

岩山の高くそびゆる下行ばうきかぬまでもあや

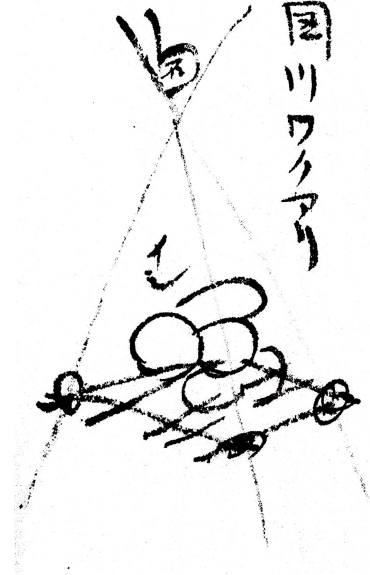
うかりけり

おのづから立いそぎでも通る也岩根そびゆる岩

の下道

本小屋 二軒

如国川ワケアリ



猶山間を下る、一二ヶ処に田少々宛あり。皆駄
ちん木伐を業とす。

野尻駅

名取郡馬場迄二里三丁三十四間

村山郡馬形迄四里三十四丁三十四間

県界まで 三里七丁四十間

これより下るに山間に。

湯の原 一軒

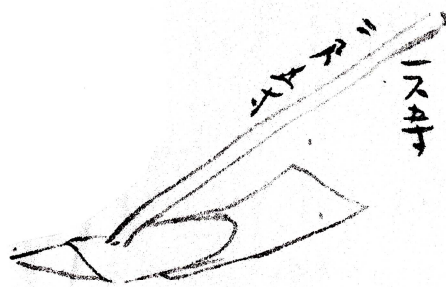
不動尊の古社あり。大滝といふ数十丈の滝あり、
是名取川上也。

是より少し村居、田畑などあり沢間の田にして
出来立よろし。殖茎あり、此名取郡辺は折々雨あ
りて橋を流す。旱の苦なく故に作合よろし。

馬場村 二十余戸

此辺も猶山間也。只運搬の荷を業とす。食物は
此辺大麦、大根葉等の粮を用ゆ。粟、麦、大豆、
大根とも総てよろし。

所用、山形まで、最上、村山、名取郡とも、



みな小山の峰道を通り長袋に至る。此処に追分
あり野中を通る、東西山なり。長袋より北に傍道
は関山越也。

宇遠野原に内務省苗木仕立場あり未だ薄原にて
施行なし。松を仕立てるよし、二十丁歩位の地なり。

愛子 佐山今朝吉に宿る。

此処蓑を名産とす。蓑は泥を干たる上に播き、
藁を掩ふて養ふ。肥は下た糞なり。根付たる時雑
品の灰に人糞を交たるを脇肥とす。十枚位を残し

て真をとめ脇芽を搔とりねかすことなく縄に挟みて軒に干すなり。土は薄赤黒くかるき土にして小石の交たる六田辺に似たり。此国大方最上より莧きたり、唯奥莧と愛子莧あるのみなれど十分の一の所用に足らず。

長さゝげの種を貰う。

八月三十一日 自 宮城郡愛子

至 宮城郡仙台国分町三丁目大泉信朝曇る。午前十一時より終日雨ふる。

愛子出立、落合に至りこゝに北に定義道、南二口越の追分あり。広瀬川に沿て仙台八幡丁に至る。下愛子より八幡丁まで二里、国分丁まで一里合三里也。

南、石川と佐藤、米山行と二対差立。

仙台まで猶山間也、田畑よし。諸本草生育よし。かやの木の大木処々に見ゆ。

仙台

国分町二丁目大泉信に着。片平町、公園地内、博覧会を巡覧す。第一二三の館まで能く列陳全備したる驚くべし。第一二農業館に於る農業器械の不備なる不注意なる又驚くべし。

長町植物園見分 苧栗、岡稻いとよく出来たり。

青葉山

古館 鎮台本宮

広瀬川

広瀬川水のみどりにうつる也青葉の山の峰の松かげ

榴岡 鎮台分宮 桜あり、東にあり。

榴岡くるまにのりて過行ば桜が下に雨なかりけり

其他県庁、本学校、師範学校、裁判処其他略す。

九月一日 晴天北風 自 仙台国分町三丁目大泉信

至 宮城郡松島村扇屋弥右エ門

国分町

芭蕉辻

つゝじ岡 鎮台砲隊の前を過ぎ

宮城野

に出る。今は一円畑となり、其内操練場に致したる処あり。是はつゝじ岡の一段低き処にてつゝきたる野也。

ふりすてゝいかに帰らん宮城野の小萩の本の鈴むしのこゑ

宮城野は名のみ残りて鈴虫のすゞしろ畑と成にける哉

これより

原の町

にいで、やゝ塩釜道を通る。南に当り多く田面いと地勢よし。北は山につゞきたる村居多し。此辺黒毛と赤毛の穂多し。赤毛拔穂したり、兩種凡そ三分の一に過たり。流行稲なるべし。

此間に処々に村あり。

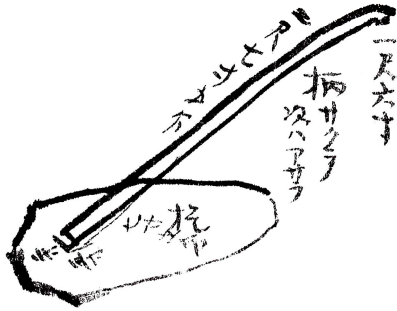
燕沢

此辺の肥桶四ツ付にして中たが太き者なり。

今市 岩切村の内

馬の鞍の産也。蒲を以てつゝみ筵をあみ、其形秋田と大に異たり。

鍬台の産也。いときれい也。



仙台に出る炭俵は如此片平なる俵にて、かたひらは柴をかけ上太と柴、縄等にて結ぶ也。故に炭は太き一本炭也。

垣は秋田の炭俵の小俵なるものにて萱を以て造る。

蒲はふけ田に造る、今刈居る。

鍬の大いなること最上の壺増なるものを用ゆ。

冠川

を渡りやゝ行て左松島へ三里廿七丁、右塩釜へ二里十七丁と追分あり。これより塩釜道を行、市川の入口右の方に二丁余入て野手の上に多賀城碑あり。此辺古瓦粗見ゆ。

くだけたる多賀の下城の瓦まで芝生にすたる

壺の石碑

これより十四五丁右に入て

八幡村の内 末の松山

八幡村の上なる墓所に古赤松生たり、これなん末の松山といふ。これより八幡の村内、此松山より五十間過ぎ民家の囲の傍に

沖の井

池の内に右村あり。此八幡より塩釜に通る往還あり、村末の橋を渡り六七丁行て留具といふ村の

近付左に山あり

楓山 なり。

古楓二本あり。この右は田なり。古楓より少し前に右に別るゝ田中道あり、堰にかゝれる橋を

安倍の松はし 思惑橋これなるべし。

傍に楓あり、これ楓山安倍の松はしとは此所なりといふ。それより村居を十丁ばかり過て田沢につゞきたる岡の先に老松あり、この所

野田の玉川

なり。能因のゆふされば石碑あり、天明の頃たてたる石也。

むしの鳴野べの裾田に風吹ば稲は波たつの田の玉川

これより小山を越塩釜村に出、海老や某に休息して

塩釜村 塩釜神社 国弊中社

塩釜神社を参詣して舟にのり松島に夕ぐれ着したり。

のる舟のこぎ行まゝにかつかくれかつあらはるゝ松が浦しま

松島の波によわたるあま人とうまれぬ身こそうらみなりけれ

松しまの春の月夜をあま人にとひばこたひもおぼろなりけり

舟のかへるをみて、

しまめぐる千賀の浦舟洲崎よりのせてかへるは夕日也けり

塩がまに夕日なびきて松島の沖の千島に日はくれにけり

松島村扇屋弥右エ門方止宿。

九月二日 晴天 自 松島

至 遠田郡小牛田村佐々木常三郎

松島

にて鰻を取るに、竹の節を取二尺位の切たるを間に三尺位縄を付け、午後に海に入置く。朝とくあぐるに其竹の間に首を入れて出らぬ也。これをさてにまげてとる也。図は後に出す。

朝松島村中西より御嶋道に入て渡月橋をわたり御嶋へわたり庵座あり、其景いふばかりなし。住すてし人もありけり松島やをしまが崎の松の下庵

また

松島や小島が崎のあととへば仏ばかりぞ住初

にける

この御嶋よりみれば竹の生たる嶋陰より朝日出る也。

渡月橋の朽たるをみて

松島やをじまにかけし板はしは月のわたるもあやふかりけり

高城

松島御宿をこえ五大堂をみて北の山を越て直に入る。入口に塩田あり水田の如く地に処々に砂を積たる見ゆ。それより山道を登り一里余行てあてら坂

此の茶屋の北より小道を伝て松山道あれど、けふはとみ山に登れば猶あてら坂を過ぎ四五丁石巻道を行て右に入り山をのぼる。

富山

此山にのぼれば東金華山、西は小山つゞき、南松島、北遠田郡又は品井沼見ゆ。富山にて眺望してもとのあてら坂に帰り

松島の千嶋にうかぶ浦舟は木のはながれしかげかとぞ見る

小道に入北小泉村を過ぎ山道を行て麓なる村に下り川をわたりて

品井沼

の芦原の中道を行、山の村に至りそれより七八丁過ぎ

鹿島台 に至る。これより小山道を過て

長尾村

に入る。こゝにて志田郡の田面広々として一目なり。東西に長く南北に高山なく、日中照射せざるなし。地勢地味尤よし。且本年は雨降の道よく田畑とも豊作なり。松山下村を過て

松山 千石村とあり、元大庭周防一万三千石の地。

この処を過ぎ田甫道十三四丁を過ぎ

鳴瀬川 をわたり直に

青野村

に至る。猶田道を少し過て川あり、これ南は志田郡、北は遠田郡（地勢志田郡に同じよろし）の郡界あり。少し野末の道を行ば瀬戸づくり白土あり。猶行て

北浦村 に入る。田面を少し過ぎ

手飼村 あり。直に土手を伝て

小牛田村

に下りてやどる。兄と物かたるうちによの人の好む処はかなきをよめり。

ことのはに引くらべては三の緒のおとは耳にも残らざりけり

旅宿にて登米郡上沼村千葉勘之助に聞く。

百刈は三百坪、新反別一反八九畝歩、三手打六抱壺束也。

万巻村にある谷地中辺は三四万刈も造る人あるよし。

登米は田の外の産は

麻 桜場、加賀野、黒沼辺尤多し。これを作るに一反歩に種七升の見込。前年秋より人糞を混し深耕すること幾返もする也。春に至てこれを播種す、一尺八寸畝に二筋にまく也。

いもの子 みろく地、上沼辺尤多し。これを作るに馬肥を下糞をして壺尺三四寸位を放て植る。子を蓄るに秋子を取らず、乾地の湿りなきに四五尺の深き穴を穿ち砂と交ぜ蓄をく也。

苗代は刈草を少々入れ秋までいくたびとなく耕也。

田は秋耕して春打返す。かつき代して植る也。

二百十日 遠田郡もに至れば水を落す也。

平地は麦、山は雑糧也。

登米より松前に行を東街道と云う。野蒜道なり。

筑波則南部道を通りと云ふ。

古川町は上米也。玉造米とはこれ也。此辺草取るに数を限らず、出穂するも猶とる也。大方五六遍とる也。

杭棒と唱ひ稲を田に刈たる否穂にして束立し乾たるを杭棒にかけ、これは百五十抱位かけ其後に運びにほにする也。又はさがけもあり。

遠田郡苧稻を穂を下にして束立し藁乾たるを三束となし穂を干、後そんそりとして十二束干いづれも田の中也。

九月三日 晴天 自 小牛田

至 栗原郡有壁村佐藤よし

品井沼は黒川郡、留山は加美郡也。

小牛田 出立、田中道を過て

中坪 猶田中道を過て

田尻 に出て野山を行

栗原郡高清水村

に出たり。是本道なり。築館二里十五丁三尺、仙台へ十三里卅五丁余。

小山田村

からとりは旧五月に植て八月に喰、子を蓄種とす。

此辺廿日の風少々さわりたり、並木等少々に折れたり。白米一升十銭。

筑館 仙台より十六里半

柳の並木ある田中を過ぎ

宮野村

に至り山をのぼりくれば、山根の左にして朝日対たる朝日清水。右にして夕日に対たる夕日清水といふ。それより右の山根折の道を通て鷹の羽清水。それよりやゝ行て小方なる村より坂をのぼり姉齒の松に行。

鷹の羽の清水は背高く鷹の羽の如くなるより背をつたへて流るゝ故にいふと也、しかとわからず。

姉齒の松

姉齒村の少し高き小山の道の傍にあり。老松四本のある中に、文化九年壬申四月姉齒村三郎兵衛なる人の立石にして、磐井郡流小野寺東鷲書にしていとよく書かれたる碑面に、業平と祐氣秀能長明と田人の歌を書たる碑あり。

枝たれてこけむすみればくりはらのあねはの松も老にける哉

これより峰道を壺町ばかり行て

硯ヶ池

今は小き溜なり。そのかたわらの藪中に片羽の萱

あるよし。これより三四丁村中の小道を分て

沢辺駅 に出る。田中道少し過て

金成駅 に入る。山道二里斗り過て

末野村

に入る。猶山道を分て有壁に至り、この間双方野山なり。

九月四日自 有壁村

至 岩手県陸中国胆沢郡金ヶ崎村千田源吉午前八時頃まで小雨ふる。晴天となりまた午後四時頃より雨ふる。

有壁 出立。

山道の野山を行々一里斗りにして宮城県陸前国栗原郡と岩手県陸中国磐井郡の界あり。仙台より二十三里余、岩手より二十六里余。

山を下り

真柴村 に至る。直に

一の関町 有壁より二里半、前沢へ三里半

こゝは旧田村左京太夫三万石の城下也。市中に磐井川の橋あり。これより

山の目村

此近郷をみれば円き一の沢間也。田中道を通して

平泉村

に至る。此辺みな麻の産地にて七八尺の干たる麻幹を多く駄送せり。此平泉はかの義経の旧跡なり。村中凡一里半ばかりの長き村也。やゝ行て

衣の関

此関村は左右に高き山あり後に衣川あるいとよき関処なり。中尊寺あり、弁慶の旧跡あり。

衣川は則此衣の関村末なり。

衣川やゝ秋更て旅人のわたるせ寒く成にける哉此川末直に北上川に落合なり。川向に高き山あり。此衣川を堺として

胆沢郡

となる。直に

下衣川村

に入る。村つゞきに金命丸うる村あり、瀬原なるべし。

白馬村

みな山道を過て

前沢駅

に入る。猶小山道を行て

稲置村

古城村

此辺まだ田草を取おれり。前沢辺より岩手のか

たは次第に雪つもるよし。前沢より仙台のかたは大凡二三尺に過ずして、彼岸の頃にはざうり道となるよし。

中野

秋成 みな処々に小坂あり山根につゞきたるむら也。

常盤

水沢駅 元水沢県の跡也。

塩竈村とあり、これより金ヶ崎へ一里二十七丁。水沢近郷の地勢仙北に似たり。高山につゞまれたれど、北の方山低し。町つゞき

下幡

田中道を過て

宇佐村

のわたりを過て

西根村

に入り、直に

金ヶ崎

に入る。

野も山も道は開けて大御代は馬に車にかよふ旅哉

九月五日 晴天 自 金ヶ崎

至 岩手郡岩手呉服丁高瀬清蔵

金ヶ崎を出立、山道を行々一里半位にして

郡界 陸中国、胆沢郡三ヶ尻村、東和賀郡相去村。

猶処々に民家あり。小山道を行に川ぞひのなはて道を通り

相去村

に入る。此辺畑多し、田は下田也。村中につゞき

下鬼柳村

に入る。それより少し行て大なる橋あり、これをわたり

黒沢尻町

に入る。此地より花巻まで三里十一丁。小山道を行、直に

二子村 なり。猶

成田村 につゞく。小山道を行て

郡界 東和賀郡成田村、稗々郡十二丁目村。

猶小山道を行て

外薨 につゞく

大根子村

川口村 を過ぎ

花巻村

に入る。石鳥屋まで三里十一丁、郡山まで五里。これより初て田畑中の平坦の地也。森岡まで猶同じ。

此辺までみな糧を食ふ。

好地

大淵

口詰 を過ぎ

郡山村

に入る。十三四丁過て二日町某村に古館山の旧跡あり。村つゞき

高水寺村 猶小村あれど略

郡界 紫波郡津志田村、南岩手郡向中野村。

猶行に平垣を過て岩手町に入る。

九月六日自 岩手町

至 秋田県仙北郡生保内村畠山三治右エ門

午後晴天。

岩手町 雫石まで四里十二丁五十間

岩手を立、勸業課に至り圈内從覽を乞しに戸長の奥印なる願書持参の由なれば延引す。公園地などを見るに草繁茂せり。

此町をいで下厨川より川ぞひの往還を過ぎ、此間の村を略す。田面いと土地あしく

雫石 に入る。

橋ばまで二里半位、森岡より六里二十八丁二十間。

これより小山道を行々、左右野山みなそば畑の

花盛也。

橋場 峰の境まで二里十一丁二十間

に入る。やゝ土地も稲もよろし。

右となり左となりて村雨の雲の中行秋の山越

白雲のなどつゝましくおもふらん岩手のみねの晴行も有哉

岩手山ふもとの野べに秋更けぬ古畑そばの花白くして

峰を越るほど雨なり。峰の庵にやすらひて昼食す。くだりて中腹にて田沢の沢見ゆ。

国見峠、ぬきうち茸あり、ぶな、いたやに生ず。旧七月初旬より生たり。それより

生保内町 岩手より二里半

に入る。今日は凡十二里。

此辺今大根畑を蒔。麻を引たるあとなるよし。

今蒔たるは柔にしてよし。早蒔は大根堅くしてよろしからず。本年は田畑ともよろしきよし申事也。

紅葉ちる夕山嵐秋更てわたるせ寒き谷川の水

九月七日

自 生保内村

至 仙北郡境村鈴木慶助

生保内

南北に長く東西に短し。土地あしくして極山間也。稻生育短く殖莖少し、玉川のわたりあり。

玉川 わたし

刺巻

土地同じ、小山を越猶同道の内なるよし。みな同じ事也。これにて一沢辺となれり。

卒田の内、出口より出てやゝ沢間広し。此出口より真崎野にいづる。此所瀬川徳助の持地也。いと広く土地も可なり。稻生よく地広し。桐畑をつくるよし。

卒田 これより生保内まで二里半

村を出るにやゝ広し。

若松新田村 村つゞき

荒川尻村

小松村

此三ヶ村左右に村居もあれど一の沢間也。此小松村より山をめぐり三四丁にして

角館町

町は菅をつくる処也。繁茂したるに此頃鎌にてきり、間た間たを取り去り捨る也。これより南は六郷に出る道路平坦なり。西のかた渡りをわたり小山の裾を越

西長野村

に入る。この村は東西に長き山間にして土味よろしからず、下等の上位なり。生保内辺よりは遙にまされり。村中弍里斗りあり。これまで一の沢間なり。山を越、此峠にて角館と淀川と川水脈わかるゝ也。

稲沢村 二十余戸

にくだる。極山間の田也。やゝ行て同村の支郷水沢村に入る。少し沢間広し。此村中より北三十五丁にして荒川の鉾山に入る追分あり。鉾山に此辺薪米を雲然辺のもの多くくり出よし。これより広野あり。行々

落合村

に入る。此広野は此村の上下にありて、土地上ぼく、下真土の柔らかなる也。これより西に猶くだり、山間の川一筋のわたること十三ヶ処にして荒川鉾山の新道の追分にいづる也。行々宮田村と荒川鉾山の追分あり。宮田は北の方也。荒川はやゝ広き沢間也。此辺白川はあたりを植る者多し。極山間はすなら多し。

下淀川村

本村に出、本道に合す。六七丁過

境村 に入る。

九月八日

自 境村
至 帰宅

前曉大雷鳴雨、昼晴たり。

境村 此辺大里は刈取たり。

舟沢

平年より作合よろしく見ゆ。根花もちの出る処なり。

神内

舟岡 猶作合同じ。

和田

戸島

横山

牛島 此辺猶ことなる事なし。

秋田馬喰町

八橋

土崎湊

相染

飯島

中野

小泉

堀田
岩瀬
龍毛
山田

九月八日 帰宅

きのふまでいかにとおもひわづらひしふるさと人もことなかりけり

石川貞直

金三十老円五十銭 持参金

内七十銭 今野莊左衛門へわか代

〃八十銭 高橋正藏へくり代

〃七十銭 高垣慎吉へ土産

〃六十銭 山形県地諸関

〃二十銭 宮城県同上

〃三十五銭 岩手県同上

〃二十銭 よせ木箱代橋本渡

〃三円五十五銭

残り式十七円九十五銭

内十六円二十銭 在金

又掛り十一円七十五銭 旧七月十六日より八月四

日まで十九日間旅費

博覧会の景況

該会は仙台宮城庁下、片平町公園地内に設く。場内の体裁整備たるや、陳列の順序及び終覧人の通路能く縄張りし、事務処の体裁、休息処、売店、飲食店の結構実に十年の内国博覧会恥ず。然るに農業館の出品、第一館には生急種紙に属する物少なからずと雖も、第二の館内農器の部には僅々陳列するのみ。実に老農の眼に止るもの有るべからず。是該掛員の不注意なるべし。

農業の不利なるより民家耕耘に苦しむことを知らずや。農の不利は則一県一国の損失に関する事ならずや。予業暇を盗み七十里を遠しとせず本場に臨むは何ぞや。則農具の便益を謀り県内同業者に其洪益を及さんとするを主眼として、過日川辺郡平尾鳥村を尋ね行々農器の便否に着目して本日漸く爰に至るに、現今の景況歎くべし。

平素県内に使用する者を召集する何の難き事かあらん。何れの管内も皆甲乙相隔りては、其の器形状使用自ら異り、彼が長を取ては我短を捨て益する事なからざるなるべし。然るに見るに足る。是は県民の為に深く歎ずる処なる乎。

(農況親報より)